

第2節 溝咋遺跡出土の外来系土器について

合田 幸美

第1項 はじめに

溝咋遺跡では、古墳時代集落を貫流する溝120を中心とする遺構、包含層から125点の外来系土器が出土している（表28・29）。一遺跡から出土する外来系土器としては非常に多く、関連する地域も広範であり、時期も弥生時代前期から古墳時代前期にわたる。小論では溝咋遺跡出土の外来系土器について、基礎的な分析、検討をおこなう。

なお、ここで用いる「外来系土器」という用語は、土器そのものがもたらされた、いわゆる「搬入土器」と在地で他地域の影響を受けて製作された「模倣土器」の二つの意味を含む広義な用語とし、胎土に含まれる砂粒の観察から、土器そのものが外来した可能性が高い土器は「外来土器」と呼称する。

また、外来系土器とした土器には、他地域に故地をもつものが畿内への伝播の過程において、形態が変容したと考えられるものも含めた。小論では、基本的に、在地の器形構成に含まれない土器を広く外来系土器として捉えた。

第2項 事例

溝咋遺跡出土の外来系土器の故地とみられる地域は、東は南関東から西は備後におよぶ。地域別に各事例について述べる。また、外来系とみられるものの地域が特定できないものは最後に一括した。

南関東（図295） 1370、1519の2点がある。

1370は、小形壺形土器の頸部から体部片で、肩部に突帯がめぐり、体部には縦に等間隔に7本の突帯が貼付される。突帯上には刻み目が、肩部と体部突帯間にはハケメが施される。類例は、群馬県榛名町稲荷森遺跡（榛名町教育委員会他1998）、神奈川県川崎市久地伊屋之免古墳（村田1997）などにみられ、特異な形態を示すためか各地で集成が試みられている（久地伊屋之免遺跡発掘調査団1987、角南2000）。これらの成果に拠ると、こうした縦位・横位の突帯文をもつ土器は17遺跡22例があり、東は福島県から、群馬県、山梨県、茨城県、千葉県、神奈川県、西は静岡県までと日本海側では石川県に分布し、弥生時代後期から古墳時代中期前半に位置づけられている（第6章第4節参照）。関東地方を中心に分布するが、関東地方における類例も10例前後と少なく、東海地方の弥生時代後期の土器の影響を受けた可能性が考えられている。また、出土遺跡は河川沿いに立地する例が多く、海、河川を利用した水運に伴う移動が考えられている（神沢1968・1969）。本資料は、こうした土器の分布の西端に位置することとなる。本遺跡も安威川沿いに立地する集落であることから、これまでの出土例と同じく水運に伴う移動が考えられるであろう。時期については、溝120出土土器であるため遺構からの判断は難しいが、多くの類例が属す、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭に位置づけられると考える。

1519は、壺形土器の肩部片であり、上段に羽状縄文、下段に結節縄文が施される。こうした文様構成は宮ノ台式新段階から久ヶ原式、弥生町式にみられ、静岡県東部の相模湾から千葉県房総半島にかけて分布する。この地域の弥生時代後期後半から終末にかけての文様の変遷は、結節縄文が先に消えて羽状縄文が残る傾向があり、この土器片は結節縄文が消える直前の段階とみられ、弥生時代後期後半でも終末に近い時期に位置づけられる。しかし、文様帯のありかたが関東的な原則から崩れたものである点が

表28 外来系土器一覧(1)

土器番号	区	出土層位・遺構	器 種	器 形	胎 土	備 考
53	A	7層	土師器	壺	密 石英・長石・黒雲母を含む	外来系? 山陰?
58	A	7層	土師器	壺	密 黒雲母を含む	外来系 瀬戸内
59	A	7層	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来系 瀬戸内 スリップ
61	A	7層	土師器	壺	密 石英・長石・片岩を含む	外来系 阿波 黒色顔料付着
62	A	7層	土師器	壺	密 石英・長石・赤色酸化土粒を含む	外来系 北近畿
63	A	7層	土師器	壺	密 長石・チャート・黒雲母を含む	外来系 山陰
65	A	7層	弥生土器(後期初頭)	器台または壺	密 角閃石・長石・雲母を含む	外来系 瀬戸内 口縁部に黒色顔料付着
138	A	7面	土師器	壺	密 石英・長石・チャートを含む	外来系 瀬戸内
139	A	7面	土師器	壺	密 長石を含む	外来系 瀬戸内
143	A	7面	土師器	甕	密 長石を含む	外来系 阿波
157	A	8層	土師器	高杯	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来系 湖東(奥田氏分析)
159	A	8層	土師器	高杯	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来 湖東、野洲川?(奥田氏分析)
174	A	8層	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・角閃石・赤色酸化土粒を含む	外来 河内?
175	A	8層	土師器	甕	密 長石・チャート・角閃石・赤色酸化土粒を含む	外来 河内?
176	A	8層	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・角閃石・赤色酸化土粒を含む	外来 河内?
182	A	8層	土師器	鉢	密 石英・長石を含む	外来系? 山陰
186	A	9層	弥生土器(後期初頭)	器台	密 長石・チャート・角閃石・赤色酸化土粒を含む	外来 河内?
228	A	6面 溝73	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・角閃石・赤色酸化土粒を含む	外来 河内?
259	A	7面 溝120	土師器	壺	密 石英・長石・雲母を含む	外来 阿波(奥田氏観察) 黒色顔料付着
260	A	7面 溝120	土師器	壺	密 石英・チャートを含む	外来系 瀬戸内
261	A	7面 溝120	土師器	壺	密 長石・雲母・角閃石を含む	外来系? 瀬戸内
282	A	7面 溝120	土師器	甕	密 石英・長石・角閃石・赤色酸化土粒を含む	外来 河内
329	A	7面 溝120 砂層	土師器	壺	密	外来系?
330	A	7面 溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・雲母を含む	外来系 瀬戸内
331	A	7面 溝120 砂層	土師器	壺	密	外来系 瀬戸内
332	A	7面 溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・雲母を含む	外来系 瀬戸内
335	A	7面 溝120 砂層	土師器	壺	密	外来系 山陰?
358	A	7面 溝120 砂層	弥生土器(後期初頭)	高杯	密 石英・長石・雲母を含む	外来 河内?
383	A	7面 溝120 砂層	土師器	甕	密	外来 吉備 下田所
482	A	7面 土坑129	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来系 東部瀬戸内
484	A	7面 土坑133	土師器	壺	密 石英・チャートを含む	外来系 東部瀬戸内
488	A	7面 土坑133	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来系 東部瀬戸内内 黒色顔料付着
491	A	7面 土坑133	土師器	壺	密 石英・長石を含む	外来系 北近畿
553	A	7面 溝123	土師器	高杯	密 石英・長石・雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 湖東、野洲川?(奥田氏分析)
554	A	7面 溝123	土師器	高杯	密 石英・長石・雲母を含む	外来 湖東、野洲川?(奥田氏分析)
605	A	7面 土坑134	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来系 山陰
964	C	西7層	土師器	甕	密 長石・チャートを含む	外来系 北近畿
1082	C	西7面 河川4	土師器	甕	密 チャート・雲母を含む	外来系 北近畿
1083	C	西7面 河川4	土師器	甕	密	外来系 山陰~北近畿
1200	2A-1	3層	土師器	器台	密 石英・長石・チャート・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 因幡(奥田氏観察)
1204	2A-1	溝120	土師器	甕	密 長石・黒雲母を含む	外来 河内
1210	2A-1	溝123	土師器	壺	密 長石・チャートを含む	外来?
1220	2A-1	溝123	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来 愛知県庄内川?(奥田氏分析)
1221	2A-1	溝123	土師器	甕	密 チャート・黒雲母を含む	外来系 東海 胎土は在地(奥田氏分析)
1222	2A-1	溝123	土師器	片口鉢か高杯	密 砂粒を含む	外来?
1223	2A-1	溝123	土師器	鉢	密	外来 阿波(奥田氏観察)
1224	2A-1	溝123	土師器	鉢	密 砂粒を含む	外来系 近江
1227	2A-1	溝123	弥生土器(中期)	壺または高杯	密 長石を含む	外来系 備後、山陰
1230	2A-1	溝123	弥生土器(前期)	壺	密 砂粒を含む	外来 播磨(奥田氏観察)
1240	2A-2	6層	土師器	器台	密 チャート・赤色酸化土粒を含む	外来 因幡、秋里か伯耆?(奥田氏観察)
1241	2A-2	6層	土師器	甕	密 チャートを含む	外来 因幡(奥田氏観察)
1242	2A-2	6層	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 丹後(奥田氏分析)
1243	2A-2	6層	土師器	甕	密 チャート・黒雲母を含む	外来 北陸か山陰、秋里?(奥田氏観察)
1261	2A-2	8層	弥生土器(後期)	甕	密 小石を含む	外来系 近江 スス付着
1269	2A-2	10層	弥生土器(後期初頭)	壺	密 長石・赤色酸化土粒・角閃石を含む	赤色顔料付着 1524~1529と同一個体 外来 河内ではない(奥田氏分析)
1271	2A-2	10層	弥生土器(後期)	壺	密 長石・チャート・角閃石を含む	外来系 河内?
1276	2A-2	10層	弥生土器(後期初頭)	甕	密 石英・長石・チャート・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 播磨
1279	2A-2	11面	弥生土器(中期)	壺	密 長石・角閃石を含む	外来 河内
1281	2A-2	11層	弥生土器(後期)	甕	密 石英・長石を含む	外来系 近江 スス付着
1283	2A-2	11層	弥生土器(後期初頭)	高杯	密 長石・チャート・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 四国?河内?(奥田氏観察)
1300	2A-2	土器棺1	弥生土器(後期初頭)	壺	密 石英・長石・チャート・雲母を含む	外来 阿波(奥田氏観察)
1302	2A-2	土器棺2	弥生土器(後期)	壺	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来?
1304	2A-2	土器棺3	弥生土器(後期)	壺	密 長石・角閃石を含む	外来? 河内?
1370	2A-2	溝120	土師器	壺	密 石英・長石・赤色酸化土粒・黒色粒を含む	外来系 南関東在地の胎土(奥田氏観察)
1371	2A-2	溝120	土師器	壺	密	外来系 東部瀬戸内
1372	2A-2	溝120	土師器	壺	密 石英・長石・雲母・赤色酸化土粒・砂粒を含む	外来系 東部瀬戸内 内外 黒色顔料付着 打ち欠き
1373	2A-2	溝120	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来系 東部瀬戸内
1374	2A-2	溝120	土師器	甕	粗 石英・長石・チャート・雲母・赤色酸化土粒を含む	外来系 山陰
1375	2A-2	溝120	土師器	甕	密 石英・長石を含む	外来系 山陰
1376	2A-2	溝120	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 阿波(奥田氏観察)
1377	2A-2	溝120	土師器	壺	密 石英・長石・赤色酸化土粒を含む	外来系 瀬戸内
1392	2A-2	溝120	土師器	小形壺	密	外来系 北近畿
1393	2A-2	溝120	土師器	小形壺	密	外来系 北近畿
1415	2A-2	溝120	土師器	小形器台	密 石英・長石・チャート・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来系 東海

表29 外来系土器一覧（2）

土器番号	区	出土層位・遺構	器 種	器 形	胎 土	備 考
1416	2 A-2	溝120	土師器	小形器台	密 石英・チャートを含む	外来系 山陰
1417	2 A-2	溝120	土師器	小形器台	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来系 山陰
1422	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 長石・石英・角閃石を含む	外来 河内？
1423	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 長石・チャート・黒雲母・角閃石・赤色酸化粒を含む	外来 河内？
1435	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・角閃石を含む	外来 河内？
1436	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来系 山陰
1437	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来系 北近畿
1438	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来 湖東（奥田氏分析）
1439	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来 湖東
1440	2 A-2	溝120	土師器	甕	密 長石・黒雲母・赤色酸化土粒を含む	外来系 東海
1441	2 A-2	溝120	土師器	鉢	密 石英・長石を含む	外来系 山陰
1476	2 A-2	溝120	土師器	製塩土器	密 雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 讃岐（奥田氏観察）
1477	2 A-2	溝120	土師器	製塩土器	密 石英・長石・雲母を含む	外来 吉備？
1500	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 片岩を含む	外来 阿波
1503	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・雲母・黒色粒・砂粒を含む	外来系？ 瀬戸内
1504	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 長石・チャートを含む	外来系？ 瀬戸内
1514	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・赤色酸化土粒を含む	外来系 北近畿
1515	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密	外来系 瀬戸内
1516	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 小石を含む	外来系 瀬戸内
1517	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・赤色酸化土粒・角閃石を含む	外来系 瀬戸内 黒色顔料付着
1518	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来系 瀬戸内 黒色顔料付着
1519	2 A-2	溝120 砂層	弥生土器（後期）	壺	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来系 南関東
1520	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来 阿波（奥田氏観察）
1521	2 A-2	溝120 砂層	弥生土器（後期初頭）	壺	密 石英・長石・雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 瀬戸内
1532	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	粗 砂粒を含む	外来？（奥田氏分析）
1542	2 A-2	溝120 砂層	弥生土器（後期初頭）	高杯	密 石英・長石含む	外来 吉備、旭川、総社平野（奥田氏分析）仁五式
1543	2 A-2	溝120 砂層	土師器	器台	密 長石・赤色酸化土粒を含む	外来 在地ではない（奥田氏分析）
1544	2 A-2	溝120 砂層	土師器	器台	密 石英・チャートを含む	外来 因幡（秋里？）（奥田氏分析）
1545	2 A-2	溝120 砂層	土師器	壺	密 石英・長石・赤色酸化土粒を含む	外来 因幡か（奥田氏分析）
1568	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来 加賀南部？漆7群、庄内IV（奥田氏分析）
1569	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 小石を含む	外来 河内（奥田氏観察）
1570	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 長石・角閃石を含む	外来 河内（奥田氏観察）
1571	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 チャート・雲母・角閃石を含む	外来 河内（奥田氏観察）
1572	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・黒雲母を含む	外来 河内
1573	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 石英・長石・チャート・角閃石・小石を含む	外来 河内（奥田氏観察）スス付着
1574	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 長石・角閃石を含む	外来 河内ではない（奥田氏分析）
1575	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 長石・角閃石を含む	外来 在地ではない（奥田氏分析）
1576	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 長石を含む	外来 播磨（奥田氏観察）
1577	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 石英・長石・チャートを含む	外来 湖東の南部、能登川ではない、野洲川？（奥田氏分析）
1578	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 結晶片岩・石英・長石・赤色酸化土粒を含む	外来 阿波（奥田氏分析）
1579	2 A-2	溝120 砂層	土師器	甕	密 長石・チャートを含む	外来 吉備、足守川（奥田氏分析）下田所式
1580	2 A-2	溝120 砂層	弥生土器	甕	密 石英・長石・チャート・赤色酸化土粒を含む	外来 播磨（奥田氏分析）
1612	2 A-2	溝120 砂層	土師器	製塩土器	密 石英・長石・雲母を含む	外来 牛窓付近（奥田氏分析）
1631	2 A-2	溝160	弥生土器・土師器	高杯	密 石英・長石・角閃石を含む	外来 河内
1633	2 A-2	溝166	弥生土器（後期初頭）	壺	密 石英・長石・角閃石を含む	外来 河内
1649	2 A-2	土坑84	土師器	壺	密 長石・チャートを含む	外来系？ 瀬戸内
1696	2 A-2	土坑108	土師器	壺	密 石英・長石・チャートを含む	外来 交野付近、土師の里（奥田氏分析）
1710	2 A-2	土坑129	土師器	鉢	密	外来系 山陰
1733	2 A-2	土坑165	土師器	壺	結晶片岩、密 石英・長石・雲母・赤色酸化土粒を含む	外来 阿波（奥田氏分析）スス付着
1735	2 A-2	土坑161	弥生土器（後期初頭）	器台	密 長石・チャート・角閃石を含む	外来 河内？
1969	2 A-2	土器棺4	弥生土器（後期）	壺	密 長石・角閃石を含む	外来 河内？

注意される。

2点とも、奥田 尚氏による砂粒の観察（以下、砂粒観察はすべて奥田 尚氏による。）によると、安威川流域の在地的なものである。

以上より、この2点は、溝咋遺跡周辺で、関東の土器を模倣して製作された土器である可能性が高い。
東海（図295） 1415、1220、1221、1440の4点がある。

1415は、小さな受部をもつ脚部が中実の小形器台である。廻間Ⅲ-1式期（赤塚1990・1996。以下廻間式の編年は同文献による。）に位置づけられる。

1220、1221はS字状口縁台付甕である。1220は頸部にハケメ原体のあたりが残存し、両者とも、頸部の屈曲が強く、肩部が張った器形になるとみられる。廻間Ⅱ-4～Ⅲ-1式期に位置づけられる。砂粒観察では、1220は愛知県庄内川周辺、1221は在地の土器と判定されている。

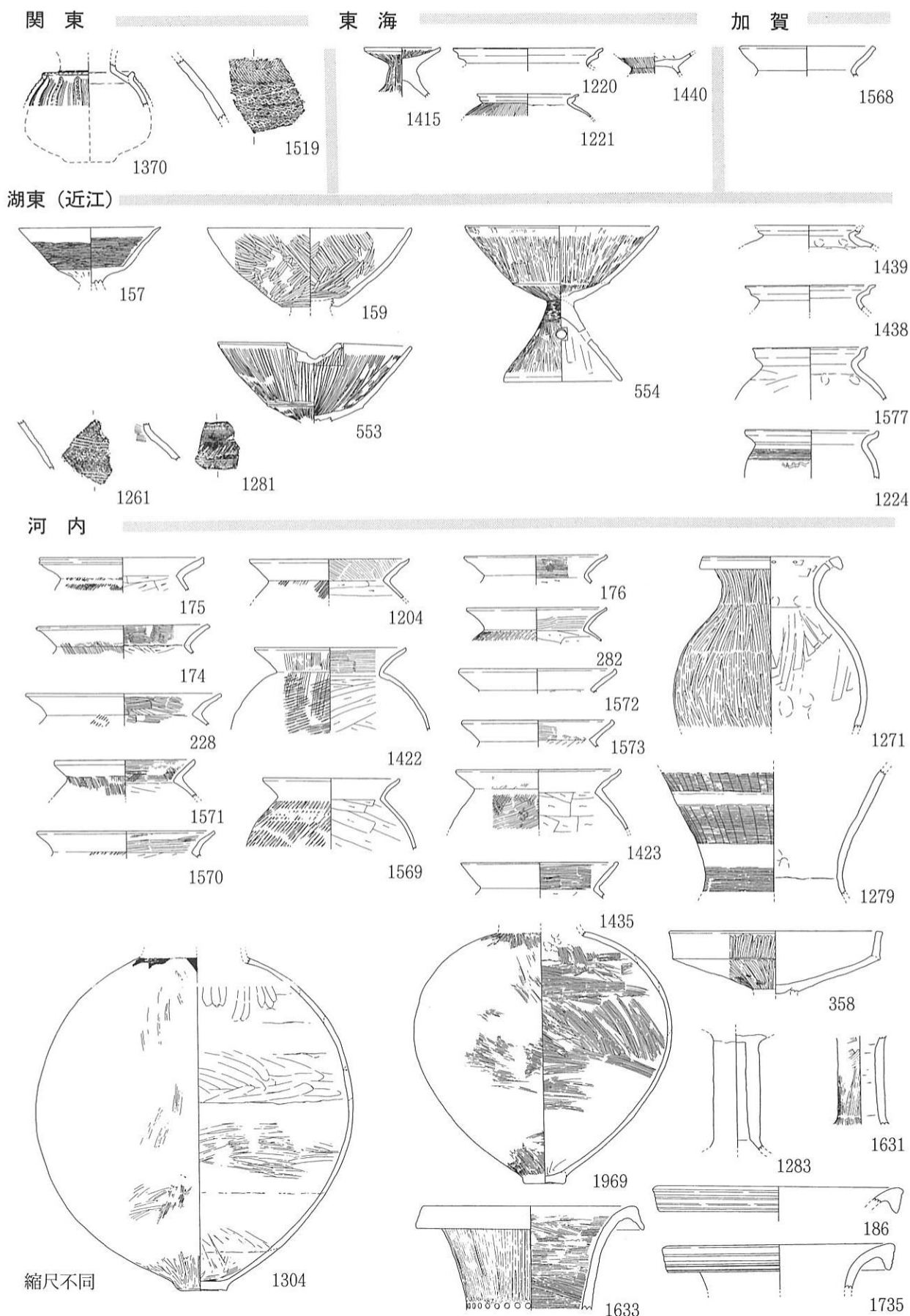


図295 外来系土器(1)

1440は、S字状口縁台付甕の底部から台部片である。底部外面の器壁は荒れる。

湖東（近江）（図295） 157、159、553、554、1438、1577、1439、1224の土師器8点と1261、1281の弥生時代後期土器2点がある。

157、159、553、554は高杯である。159、553、554は砂粒の観察から野洲川周辺の可能性が示唆されている。北近江の土器編年（宮崎1994）では顔戸G-1～2（廻間Ⅱ-1～2）に位置づけられる。

1439は頸部の屈曲が鋭角であることからS字状口縁台付甕の口縁部とみられる。1438、1577は口縁部上端に面をもつ受口状口縁をもつ甕である。1224は鉢の口縁～胴部で、口縁部はつまみ上げられ、胴部には櫛描直線文と波状文が施される。顔戸G-2～3（廻間Ⅱ-2～4）に位置づけられる。

1261、1281は甕の肩部～胴部であり、櫛描直線文と櫛描刺突文が交互に施される。外面には煤が付着する。

加賀（図295） 1568の1点がある。

口縁部がやや内湾し、口縁端部が肥厚しない布留形甕である。砂粒の観察から加賀と判定された。

河内（図295） 174、175、176、228、282、1204、1422、1423、1435、1569、1570、1571、1572、1573の土師器14点と186、1735、1271、1279、1969、1304、358、1283、1631、1633の弥生土器10点がある。

資料はチョコレート色の胎土に角閃石を含むものを中心に抽出したが、安威川上流で分岐する茨木川沿いの大岩においても、角閃石を含むハンレイ岩帯があることを奥田氏より教示を受け、在地の土器にも角閃石が含まれることがわかった。したがって、奥田氏が観察された1569、1570、1571、1573は河内の土器とみられるものの、その他の土器については在地の土器を含む可能性が残る。

土師器14点はすべて甕である。時期については、口縁部のみの資料であり詳細な比定はできないが、庄内式期Ⅱ～Ⅴ（米田1994）の範疇に含まれ、Ⅲ、Ⅳ期の土器が多い。

1304、1969は土器棺として使用された壺で、1304の頸部にはベンガラによる赤彩文が1条めぐる。それぞれ蓋として組み合わされた高杯の形態から弥生時代後期初頭に位置づけられる。1271・1633は外面ミガキで調整される弥生時代後期の壺である。1279は、頸部に簾状文、櫛描直線文が施される長頸の広口壺で、弥生時代中期後半に位置づけられる。358は高杯杯部、1283・1631は高杯脚部で弥生時代後期に位置づけられる。186、1735は、口縁部端面に凹線文が施される器台である。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

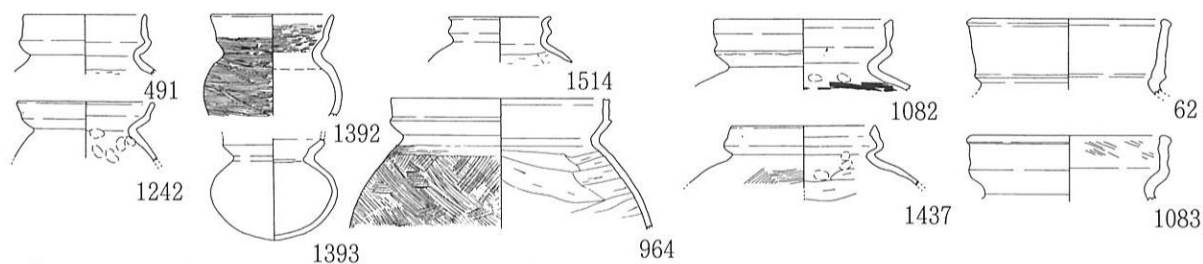
北近畿（図296） 491、1242、1392、1393、1514、964、1082、1437、62、1083の10点がある。

491、1242、1392、1393、1514は小形の壺、964、1082、1437、62、1083は甕である。いずれも二重口縁をもち、頸部から口縁部の立ち上がりやや外側に湾曲し、口縁部がやや内傾するものを含む点特徴的である。胎土は白っぽいものが多い。62、1083は、頸部から口縁部が外反し、口縁部が直立する。器形は山陰の形態を示すものの、器壁が厚く、稜線が鋭くない点から、北近畿から山陰にかけての地域の影響が考えられる。

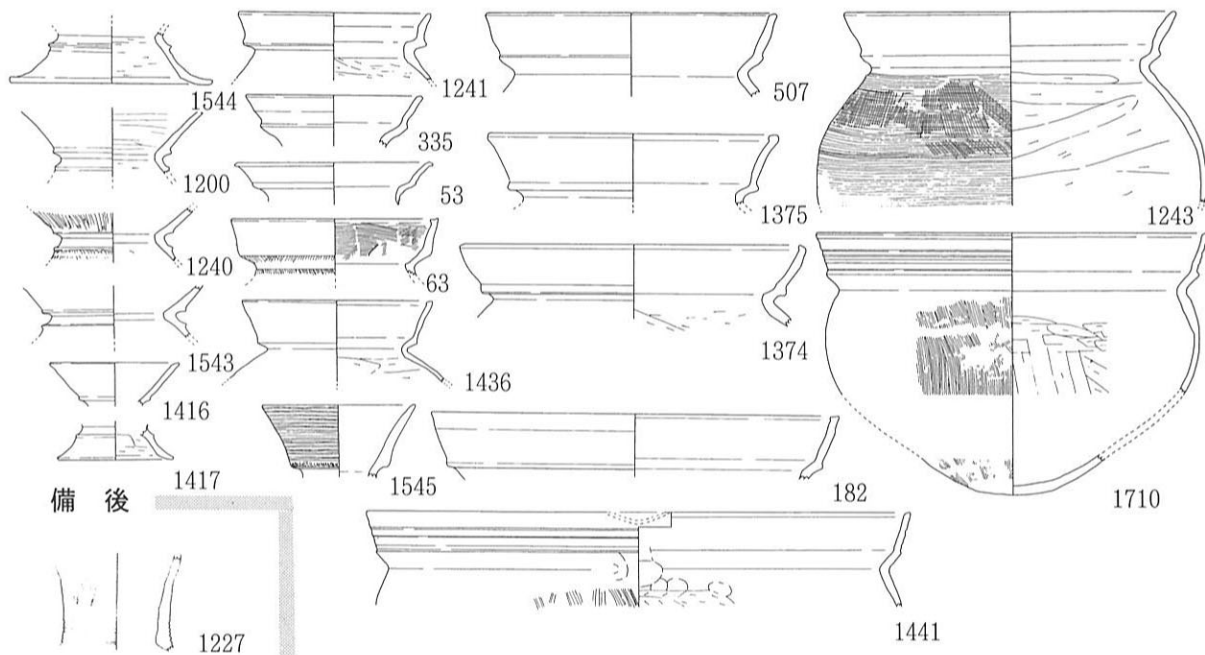
時期についてはこの地域の詳細な編年は確立されておらず、比定は困難であるが、山陰の土器編年を参照するならば、491、1242、1392、1393、1514は青木Ⅳ期新～Ⅶ期（青木遺跡発掘調査団1976・1977・1978、清水1994。以下、青木編年は同文献による。）の庄内式期から布留式期初頭、969、1082、1437、62、1083は口縁端部が内側に肥厚することから青木Ⅶ～Ⅷ期の布留式期併行期と考えられる。

山陰（図296） 1544、1200、1240、1543、1416、1417、1241、335、53、63、1436、1243、507、1375、1374、182、1441、1710の土師器が18点と1545の弥生時代後期末の土器が1点ある。

北近畿

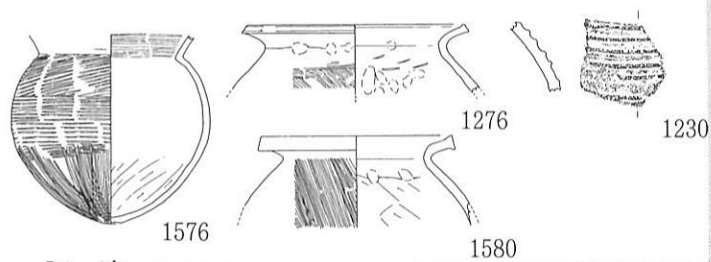


山陰



備後

播磨



阿波

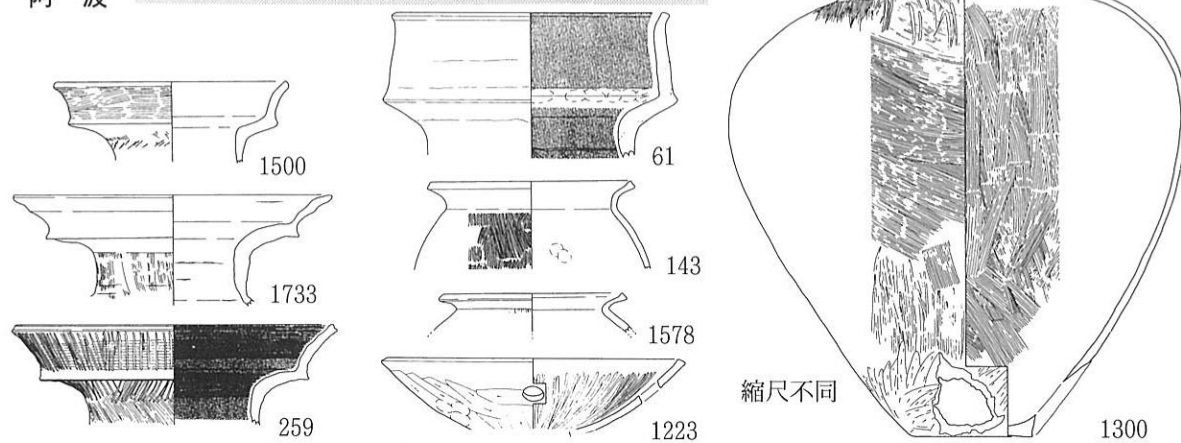


図296 外来系土器(2)

1544、1200、1240、1543は鼓形器台である。頸部は短く丁寧にナデられ、稜が明瞭である。1544は他に比べ頸部がやや長く、青木Ⅴ・Ⅵ期新に、1200、1240、1543は青木Ⅶ期に位置づけられる。砂粒観察から、1200は因幡、1240は因幡の秋里または伯耆、1543は在地のものではない、1544は因幡で秋里の可能性が指摘されている。

1416、1417は小形鼓形器台である。小形鼓形器台は山陰ではほとんどみられず、畿内の墳丘墓や出現期の前方後円墳で小形丸底鉢とセットになって出土する。山陰の土器が、畿内において畿内的な用いられ方をした特殊な器形である（中川1996）。したがって、小形鼓形器台は畿内の土器とみるべきかもしれないが、器形は山陰の特徴を示し、山陰系ともいうべき土器と考えるためここに含めた。布留式期に位置づけられる。

1241、335、53、63、1436は口径15cm以下の小～中形甕、1243、507、1375、1374は口径25cm前後の大形甕である。

1241は器壁が厚く、稜が明瞭であり、青木Ⅳ期でも古い様相を示す。砂粒観察から因幡と判定されている。335、53、63、1436は山陰の影響のもと畿内で製作された可能性をもつ。1241、335、53は口縁端部が内側に肥厚しないため青木Ⅳ期の新相から青木Ⅴ・Ⅵ期にかけて、63、1436は口縁端部が内側に肥厚し青木Ⅶ期古の時期と考えられる。

1243は青木Ⅳ期の新相に位置づけられる。砂粒観察から因幡の秋里もしくは北陸と判定されている。507は胎土が白く、頸部から口縁部にかけてやや外湾することから山陰～北近畿の土器である可能性が考えられる。青木Ⅳ期の新相から青木Ⅴ・Ⅵ期のかけての時期と考えられる。1375は口縁端部が内側に肥厚し青木Ⅶ期古に位置づけられる。胎土も砂粒が多く含まれ1241に類似することから外来土器の可能性が高い。1374は口縁端部が内側に肥厚し、また口縁部がやや内湾することから、青木Ⅶ期古のなかでも1375より新しい要素をもつ。胎土は在地のものである可能性が高い。

182、1441、1710は二重口縁をもつ大形鉢である。182は口縁端部が内側に肥厚することから、青木Ⅶ期とみられる。1441、1710は口縁部に浅い凹線が複数条めぐり、1441、1710の胎土は在地のものに類似し、これらは山陰の土器の影響のもと在地で製作された可能性が高いと考える。畿内では庄内式期から布留式期初頭にかけて大形鉢は普遍的な存在であり（寺沢1986）、1441、1710もこの年代の中に含まれると考える。

1545は擬凹線文が複数条めぐり、稜線直下には刻み目が密に施される。壺の口縁部とみられるが、頸部径が小さい点が留意される。胎土は肌色を呈し、砂粒が多く含まれるが表面は平滑に丁寧に調整されている。青木Ⅲ期新に位置づけられる。

備後（図296） 1227の弥生土器1点がある。

直径からは壺の頸部とみられるが、頸部とした箇所剥離痕からは高杯の脚部となる可能性を残す。頸部には、波状文と櫛描直線文がめぐり、弥生時代中期前半に位置づけられる。

播磨（図296） 1576の土師器1点と1276、1580、1230の弥生土器3点がある。

1576は、体部上半に細かなタタキが水平からやや右上がり方向に施され、体部下半には下から上へとハケメ調整が施される。内面は体部下半がケズリ、上半は板ナデ、頸部内面はハケメが施される。頸部内面は丸く稜をもたない。砂粒観察から流紋岩組成の胎土であることが指摘されており、庄内播磨型甕（米田1992、岸本1995）とみられる。本遺跡における庄内播磨型甕はこの1点のみである。

1276、1580は甕である。口縁端部に面をもち、面の両端は明瞭な稜をもつ。体部外面には細かいハケ

メが斜方向に密に施される。内面は頸部より下にケズリが施される。胎土は橙色を呈し、丁寧な作りの土器であり、在地の石英、長石を多く含むやや肌色を呈する土器とは異なる印象をもつ。奥田氏による砂粒観察から播磨と判定され、ここに含めた。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

1230は壺の体部片である。細い帯状の突帯がほぼ等間隔にめぐり、突帯上に刻み目がある可能性があるが、磨耗のため不明である。市之郷遺跡に類例がみられ（今里1943）、弥生時代前期末に位置づけられる。本遺跡の外来系土器中最も年代がさかのぼる資料である。砂粒観察からも播磨と判定された。

阿波（図296） 1520、1500、1733、259、61、143、1578、1223、1376の土師器9点と1300の弥生土器1点がある。1300は中部瀬戸内の土器の様相を示すが、砂粒観察により片岩の存在が指摘されここに含めた。後述する瀬戸内の土器にも、260、261、488、1372、1377のように阿波の土器に含まれる可能性をもつ土器があるが、ここでは胎土に片岩が含まれるものを抽出し、阿波の土器とした。ここにあげた土器は、砂粒観察からすべて阿波の土器と判定されている。

1376は壺の口縁部で、肥厚した口縁部には退化した凹線文が2条めぐり、

1520は広口壺の口縁部である。口縁部端面に擬凹線が3条めぐり、端部はやや内側につまみあげられる。直立する頸部から口縁部が屈曲し大きく開く器形となるであろう。

1500、1733、259、61は二重口縁壺である。いずれも頸部が直立し、1500、1733、259の口縁部は外反し、61の口縁部は内傾する。1500は在地の二重口縁壺の形態と峻別しがたいが、胎土に片岩を含むためここに含めた。1733、259は頸部と口縁部の接合部が突帯状に鋭く外方へとのびており、在地の二重口縁壺に比べ、この点が特徴的である。259は、内面に黒色顔料が塗布される。61は北四国から播磨、畿内にかけて分布する大形壺形土器である。本資料も内面に黒色顔料が塗布される。

143、1578は甕である。薄い器壁をもち口縁端部はややつまみあげられる。143に比べ1578は頸部の屈曲が強く、やや新しい要素をもつ。143の体部外面には細かなハケメが施される。

1223は穿孔があることから、碗形の杯に裾が大きく広がる脚台が付く高杯Eになる可能性が考えられたが、外面にケズリが、内面に丁寧なミガキが施されることから、ここでは鉢として図示した。

143、1578、1223は、いずれも胎土が精良で、あざやかな橙色を呈する点が特徴的である。

以上の土師器は黒谷川Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられ（勝浦1995。以下、黒谷川編年は同文献による。）、1376はやや時期が降る可能性がある。

1300はやや頸部の長い広口壺である。肥厚した口縁部には凹線がめぐり縦方向ハケメが部分的に施され、頸部には羽状刺突文がめぐり、体部下半から底部にかけて焼成後の穿孔が2カ所みとめられる。口縁部外面に砂粒が付着する黒色物質がみられ、黒色物質は強い粘着力をもっていた可能性がある。本資料は土器棺として用いられ、弥生時代後期初頭に位置づけられる。先述したとおり、本資料は型式的には中部瀬戸内の土器ととらえられるが、胎土に片岩を含むという指摘をうけ、阿波に含めた。

吉備（図297） 383、1579の土師器が2点、1477、1612の製塩土器が2点、1542の弥生土器が1点ある。

383、1579は二重口縁甕の口縁部である。拡張された口縁部外面には浅い多条の櫛描直線文がめぐり、下田所式に比定される。1579は砂粒観察から足守川流域と判定されている。

1477、1612は小さく低い脚台をもつ製塩土器である。脚台から大きく広がる体部にはタキが施され、器壁は薄く仕上げられる。胎土は内外面ともくすんだ橙色、断面は黒色を呈し微細な砂粒を多く含む。1612は砂粒観察から牛窓周辺と判定される。両者とも脚台3式、古墳時代前期に位置づけられる（広瀬1988）。

1542はやや小形の高杯の口縁部である。口縁部には凹線が2条めぐり、端部に面をもつ。胎土は赤褐色を呈し砂粒を多く含み、他の土器とは全く異なるものである。砂粒観察から旭川流域と判定される。弥生時代中期終末の仁伍式に比定される。

瀬戸内（図297） 播磨、吉備、讃岐、阿波を含む、瀬戸内でもとくに東部瀬戸内の影響がみとめられる土器を一括した。ある程度地域が限定される土器については個々に記述する。

139、330、1371、484、58、1515、1516、1517、138、1373、1649、488、260、1372、1518、332、59、482、331、1503、1504、261、1377の土師器23点と65、1521の弥生土器23点、1476の製塩土器1点がある。

139、330、1371、484、58、1515、1516は壺である。139、330、1371、484は頸部が直立し、口縁部が屈曲して大きく開く。139、330、1371の口縁端部はやや上方につまみあげられる。58、1515、1516はやや外傾する頸部から口縁部が外方へと開く。口縁端部はやや上方につまみあげられる。330、1371、1515、1516にみられるように、内外面とも横方向の丁寧なミガキで仕上げるものが多い。讃岐を中心とする北四国の影響が考えられる（岩崎1984）。庄内式期に位置づけられる。

1517、138、1373、1649、488、260、1372、1518、332、59、482は大形の二重口縁壺で、四国系複合口縁壺、讃岐系複合口縁壺、西部瀬戸内系複合口縁壺と呼称されるものである。

1517、138は外反する頸部に内傾する口縁部が付き「く」字形の口頸部をもつ。1517は胎土がチョコレート色を呈し角閃石を多く含む。こうした胎土をもつ土器で、胴部から肩部にかけて傾斜を変えやや直線的になる土器は、讃岐産といわれながらも、播磨に類例が多く畿内でもまみられ、土器棺として利用される場合が多い（岸本1996）。一方、1517のように胴部から肩部が球形を呈するものは畿内に多く、とくに大阪府に多く分布することから、讃岐の影響下に大阪で製作された可能性が高いものであるが（陣内1998）、外来系としてここに含めた。1517は、溝120から散在して出土した破片を接合したものであるが、口頸部内面に黒色顔料が塗布されることから土器棺として利用された可能性が高い。庄内式新相から布留式古相に位置づけられる。

1373、1649は外反する頸部にほぼ直立する口縁部をもつ。この土器も類例は畿内に多く、大阪府、滋賀県に多くみられることから（陣内1998）、1517ほど讃岐の影響は色濃くないものの、東部瀬戸内の影響のもと畿内で製作された可能性が高い。また、陣内氏の指摘のとおり、山陰の影響も看過できず、とくに1649の肩部に押印された円形刺突文は注意される。布留式期でも新相に位置づけられる。

488、1372、260は大きく湾曲しながら外反する頸部にやや内傾しながら直立する口縁部をもつ。1733、259の阿波の土器でみられたように口縁部の接合部が突帯状に鋭く外方へと伸びる。488、1372は内面に黒色顔料が塗布される。庄内式新相から主に布留式期に位置づけられる。

1518、332、59、482は口縁部が比較的短く立ち上がるもので、1518、332は頸部が直立した後屈曲し、59は頸部が大きく屈曲する。内外面ともミガキで丁寧に仕上げられ、1518は口頸部内面に黒色顔料が塗布される。これらの土器も類例は大阪府を中心とする地域に多く、1517、138、1373、1649のような東部瀬戸内の影響を受けた土器が畿内的に変容した土器とみられる。布留式期の前半に位置づけられる。

331、1503、1504、261は畿内における器形構成に含まれるとも考えられるが、外来系の要素が在地の土器に比べ大きく、ここに含めることとした。

331、1503、1504は口縁部が広がり面をもつもので、二重口縁壺と広口壺の折衷形態ともいえる。1503、1504は口縁部に羽状刺突文がめぐる。羽状刺突文は阿波から備後にかけての瀬戸内で広くみられるため

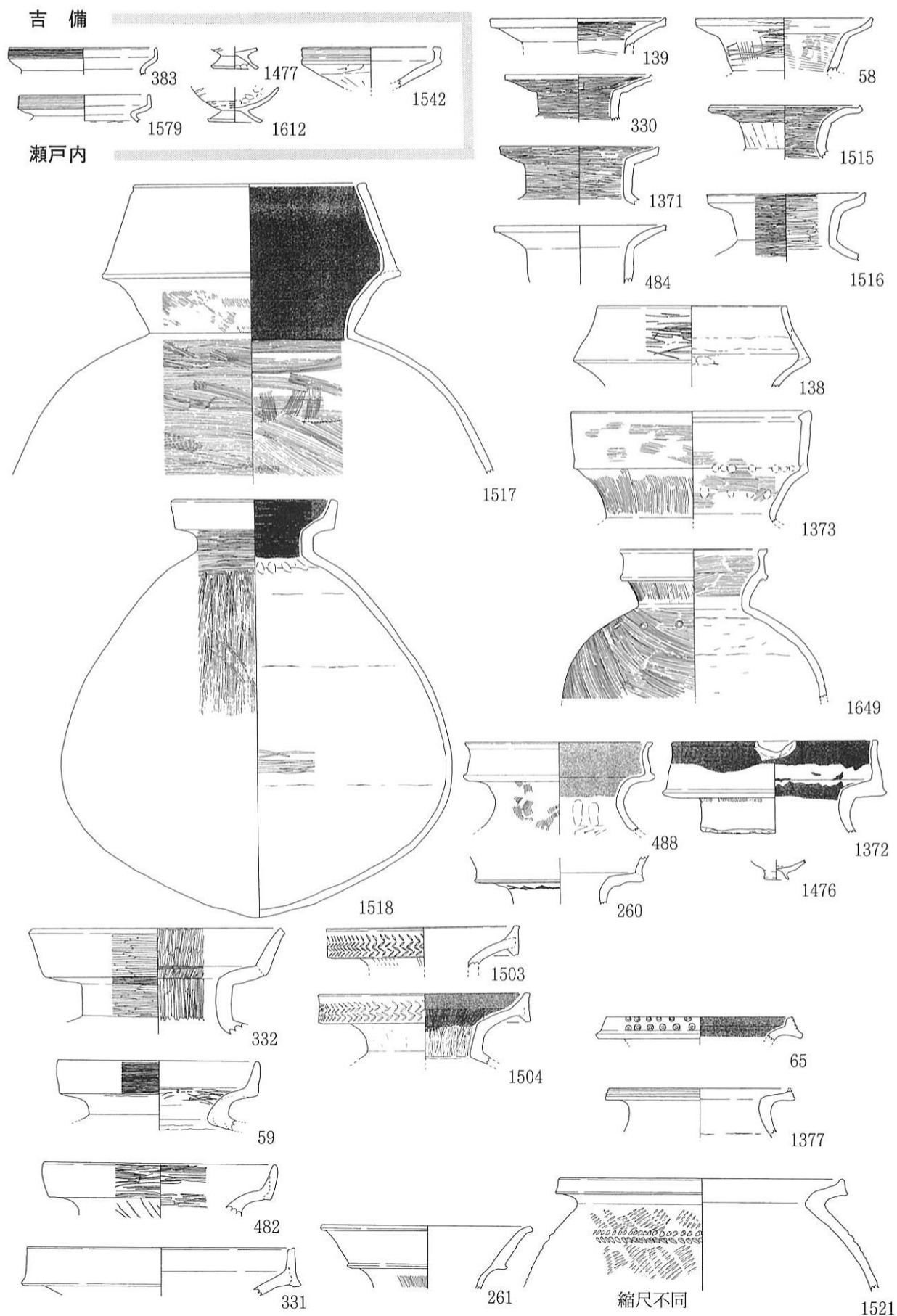


図297 外来系土器(3)

ここに含めた。1504は内面に黒色物質が塗布される。

261は頸部と口縁部の接合部が鋭く外方へのび、阿波の土器に似た形態を示す。

1377は壺の口縁部で、やや内傾する頸部から口縁部が屈曲して大きく開き、口縁部端面には凹線文が3条めぐる。阿波の壺に類似し、阿波の土器編年では黒谷川Ⅱに比定される。

65は器台もしくは壺の口縁部であり、上下に拡張した口縁部端面に2段の竹管刺突文が施文される。胎土はチョコレート色を呈し角閃石を多く含む。内面には黒色顔料が塗布され、この点からは壺の可能性が高いと考える。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

1521は大型の壺である。頸部が強く屈曲し、口縁部が短く、端部はやや上方にのびる。体部外面にはタタキが施され肩部には羽状刺突文が1条めぐる。胎土はチョコレート色を呈し角閃石を多く含む。当初胎土から讃岐の高松市周辺に類例を求めたものの類例はみられず、対岸の吉備南部の可能性が考えられた。しかし、吉備では、タタキは備前地方まではみられるものの多くはなく、羽状刺突文は山間部から備後にかけての技法であり、角閃石を含む胎土は特殊器台にいくつかみとめられるものの他の器形では用いられないことから、播磨の方に類例が求められる可能性が残った。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

1476は小さな脚台もつ製塩土器である。砂粒観察では讃岐の土器と判定された。脚台4式、古墳時代前期に位置づけられる（広瀬1988）。

地域が特定できないもの（図298） 329、1210、1696、1532、1574、1575、1222の土師器が7点、1269・1524（同一個体）、1302の弥生土器が2点ある。

329、1210は壺の口縁部である。二重口縁状に口縁部が上方に立ち上がり面をもつ。329はミガキ、1210はナデ調整で仕上げられ、両者とも胎土が精良で丁寧に仕上げられる。庄内式期に位置づけられる。

1696は二重口縁壺の口縁部である。外反する頸部に直立する口縁部が接合し、口縁端部は内側に肥厚する。北近畿の土器に類似すると考えたが、砂粒観察では交野市付近もしくは土師の里の土器と判定された。

1532は二重口縁をもつ小形丸底壺と考えられる。口縁部が外傾し、在地の小形丸底壺では類例がみられず、北近畿から山陰にかけての地域の影響が考えられた。砂粒観察では在地か外来かの判定はできなかった。

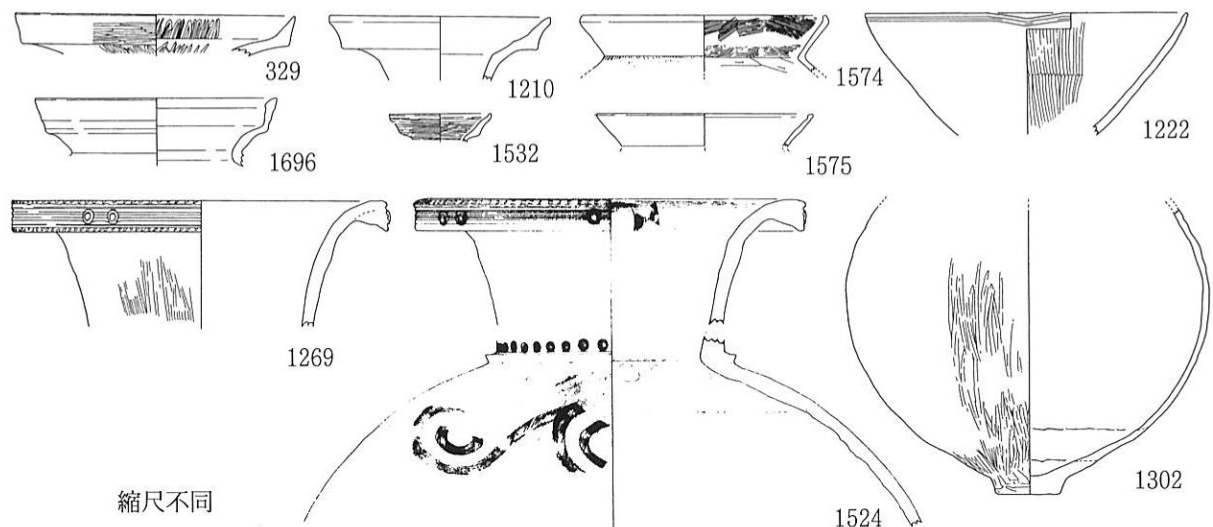


図298 外来系土器(4)

1574、1575は甕の口縁部である。1574は口縁端部がつまみあげられるもののやや丸い作りであり、頸部は明瞭な稜をもつ。胎土がやや灰色を呈し庄内播磨型甕の可能性を考えたが、砂粒観察の結果は河内の土器ではないというものであった。1575は角閃石がみられず、砂粒観察では在地の土器ではないと判定された。

1222は片口をもつ鉢もしくは高杯の杯部である。高杯とすれば554のような東海～湖東でみられる深い杯部をもつ形態になるであろうが、口縁端部の下にめぐる凹線に注目すると鉢となる可能性も考えられる。

1269・1524はベンガラによる赤彩文で肩部に渦巻き文が描かれる広口壺である。胎土は薄いチョコレート色を呈し角閃石を多く含むことから生駒西麓の土器と考えられたが、砂粒観察では河内の土器ではないと判定された。弥生時代後期初頭に位置づけられる。溝120出土の接合資料であるが、この時期の出土土器は土器棺が主であることから本資料も土器棺として使用された可能性が考えられる。

1302は壺の体部から底部である。土器棺2の体部であり、弥生時代後期の土器である。胎土は明るい橙色を呈し、粒径の大きな砂粒が多く含まれ、一見して在地の胎土とは異なるためここに含めた。

第3項 分析と検討

溝昨遺跡出土外来系土器について、出土土器に占める比率、地域別比率、器形別比率、地域と時期・器形との関連、時期について分析、検討する。

出土土器に占める外来系土器の比率 (図299) 溝昨遺跡(その1)、(その2)の調査ではコンテナを一杯にした状態で約500コンテナの土器が出土している。うち、非常に雑駁ではあるが、内訳をみると、弥生土器が10コンテナ弱、古代以降の土器が10コンテナ程度であり、それ以外の約480コンテナが古墳時代須恵器、土師器となる。これら古墳時代土器のうち古墳時代前期土師器は約430コンテナ、古墳時代中～後期須恵器は約30コンテナ、古墳時代中～後期土師器は約20コンテナを占める。

これらの土器から、外来系とみられる土器はすべて抽出し実測した。その総点数は125点であり、平置きにした破片が6コンテナと復元した大形土器が6個体である。外来系土器の年代は弥生時代前期から古墳時代前期にわたり、その内訳は、弥生時代前期が1点、弥生時代中期が3点、弥生時代後期が18点、古墳時代前期が103点である。

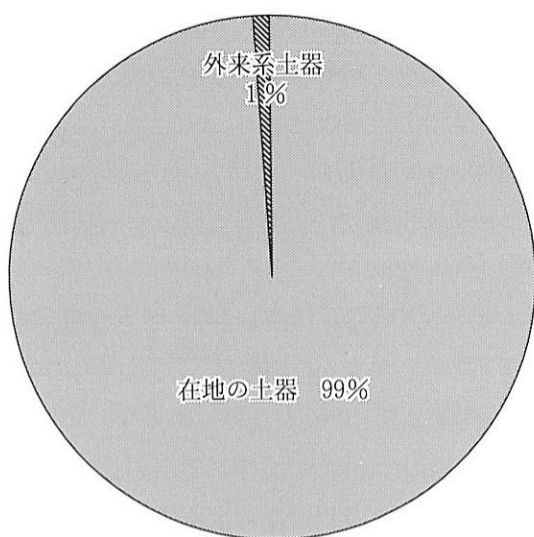
外来系土器の土器全体に占める割合をしるには土器全体の総点数が必要となるが、これを数えることは困難であるため、非常に雑駁ではあるが先にあげたコンテナ数で比率を換算してみたい。

まず、弥生～古墳時代前期の土器全体に占める外来系土器の比率をみると、440コンテナのうち6コンテナが外来系土器であり、弥生～古墳時代前期の土器のうち約1%の土器が外来系の土器である。つぎに、年代別にみると、弥生土器は土器棺が主であるため大形の個体が多く、コンテナ数で表すことが難しいが、弥生土器10コンテナのうち1コンテナと大形個体3個体が外来系土器であり、弥生土器のうち外来系土器が占める比率は約30%程度になるとみられる。古墳時代前期土師器でみれば、430コンテナのうち5コンテナと大形個体3個体で、約1%の土器が外来系の土器となる。

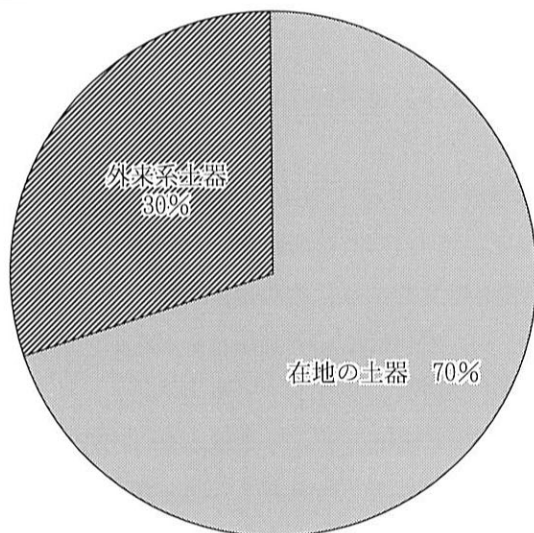
実測点数でみると、全体では1969点中123点で6%、弥生土器では59点中22点で34%、古墳時代前期土師器では1224点中103点で8%となり、土器量全体からみた比率より、やや高めの数字となる。

以上、土器量と実測点数で外来系土器の比率を算出した。弥生土器では両者に大きな差はみられず約30%という比率であり、弥生土器における外来系土器の比率は古墳時代前期に比べ高いということがい

弥生～古墳時代前期土器における外来系土器の比率



弥生土器における外来系土器の比率



古墳時代前期土師器における外来系土器の比率

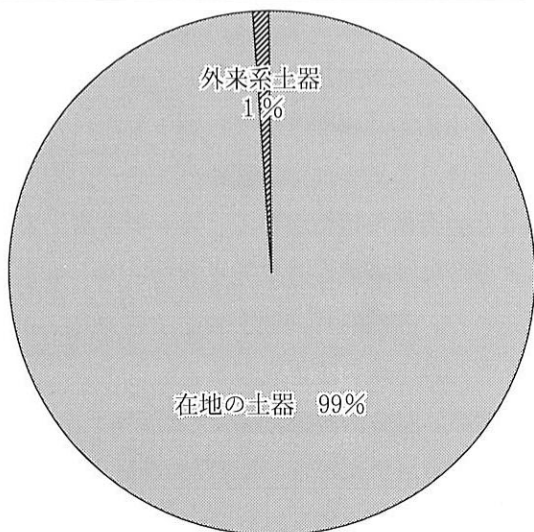


図299 出土土器に占める外来系土器の比率

える。一方、古墳時代前期土師器においては、土器量では約1%、実測点数では8%という比率となり、母数が異なるため算出される比率に差がでる結果となった。整理を進めた実感からすると、古墳時代前期土師器における外来系土器の比率は、土器量における1%という数字の方が実体に近い感じをもつ。

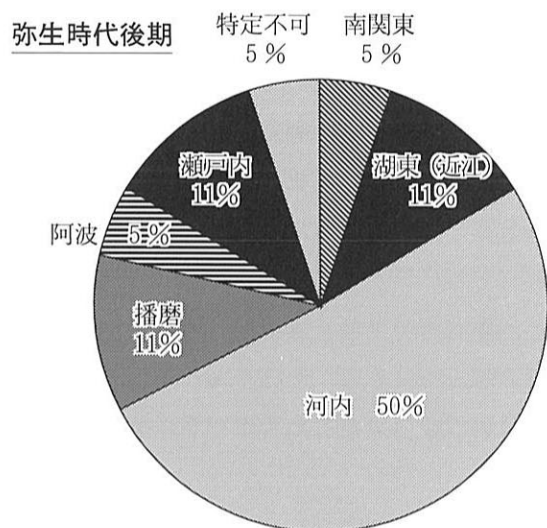
古墳時代前期の他遺跡における外来系土器の占める割合をみると、奈良県纏向遺跡（奈良県桜井市教育委員会1976）では123点、15%、奈良県矢部遺跡（奈良県立橿原考古学研究所1986）では112点、21.3%、奈良県院上遺跡（奈良県立橿原考古学研究所1983）では22点、11.4%と報告され、すべて実測点数を母数とした数値が示される。各遺跡の全体の土器量は不明であり、また外来系土器の認定方法や母数の取り方をはじめとする数的処理方法により結果に差異が認められるであろうが、以上の奈良県の諸遺跡と比べると、溝咋遺跡の外来系土器は、点数はさほど変わらないものの、実測点数に占める比率では小さくなる。

外来系土器の地域別比率（図300） 外来系土器のうち、弥生時代後期土器18点と古墳時代前期土師器103点を対象に、地域別比率について検討する。

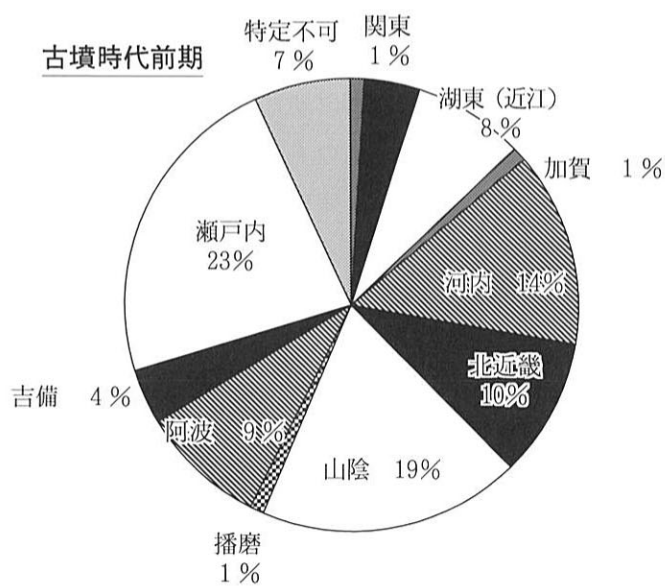
弥生時代後期の外来系土器を地域別に分けると図300、上段のようになる。河内の土器が50%と最も多く、外来系土器の半分が河内からもたらされていることがわかる。これに湖東（近江）、播磨、瀬戸内が各11%、南関東、阿波が各5%でつく。阿波、播磨の土器を含めた瀬戸内全体の土器をみると27%となり、外来系土器のうち約1/3の土器が瀬戸内からもたらされており、これに、湖東

(近江)の11%、南関東の5%がつづく。

古墳時代前期土師器を地域別に分けると図300、下段のようになる。播磨、吉備、讃岐、阿波を含む大きく瀬戸内と捉えた地域が23%と多く、これに特定が可能であった吉備(4%)、阿波(9%)、播磨



地 域	個体数
南関東	1
湖東 (近江)	2
河内	9
播磨	2
阿波	1
瀬戸内	2
特定不可	1
計	18



地 域	個体数
関東	1
東海	4
湖東 (近江)	8
加賀	1
河内	14
北近畿	10
山陰	19
播磨	1
阿波	9
吉備	4
瀬戸内	24
特定不可	8
計	103

図300 外来系土器の地域別比率

(1%)の土器を加えると37%となり、外来系土器のうち約2/5の土器が瀬戸内からもたらされていることがわかる。なかでも阿波の土器が吉備や播磨の土器に比べ多い点に注意される。次に、山陰が19%であり、これに北近畿(10%)を加えると約29%となり、外来系土器のうち約1/3の土器が山陰から北近畿にかけての地域からもたらされていることがわかる。これにつづく地域が近隣の河内で、外来系土器のうち14%、約1/7の土器がもたらされている。湖東、東海の土器は、併せて12%あり、外来系土器のうち約1/8を占める。この他、遠隔地では加賀、関東がそれぞれ1%となっている。すなわち、溝咋遺跡の外来系土器は、瀬戸内の土器が多く、これに山陰、河内、湖東～東海地方の土器がつき、このほか加賀、関東といった遠隔地の土器が少数みられるといった様相を示す。溝咋遺跡では瀬戸内、山陰を含めた西の地方の影響を受けた土器が外来系土器の半数以上を占め、湖東以東の東の地方の影響を受けた土器を凌駕するといえる。

他遺跡の古墳時代前期外来系土器の様相と比較すると、纏向遺跡では、東海地方の土器が49%と圧倒的多数を占め、これに山陰・北陸17%、河内10%、吉備7%、関東5%、近江5%、西部瀬戸内3%、播磨3%、紀伊1%とつづく。纏向遺跡は東海地方の土器が半数以上を占める点で溝咋遺跡とは大きく異なる。

次に、矢部遺跡をみると、近隣地域では大和北部28.5%、北摂23.1%、大和西南部9.6%、大和東南部纏向地域7.0%、生駒西麓8.8%、和泉2.6%、近江1.0%、遠隔地では吉備を中心とする中部瀬戸内地方8.8%(10個体)、伊勢湾沿岸地方5.4%(6個体)、駿河もしくは相模地方2.0%(2個体)、美濃、山陰、西部瀬戸内地方がそれぞれ1%である。矢部遺跡では外来系土器に近隣地域の土器を含むため、単純に比較することはできないが、個体数でみると遠隔地の土器は約20個体と少数であり、うち吉備を中心とする中部瀬戸内地方の土器が10個体と半数を占め、ついで伊勢湾沿岸地方の土器が6個体と多いようである。報告書でも指摘されるように、纏向遺跡とは違い、東海地方の土器が多数を占めることはない。溝咋遺跡とは、遠隔地の土器の点数に隔たりがみられるものの、南関東から西部瀬戸内を含む広い範囲の土器がみられる点および瀬戸内の土器が多くみられる点で共通する。

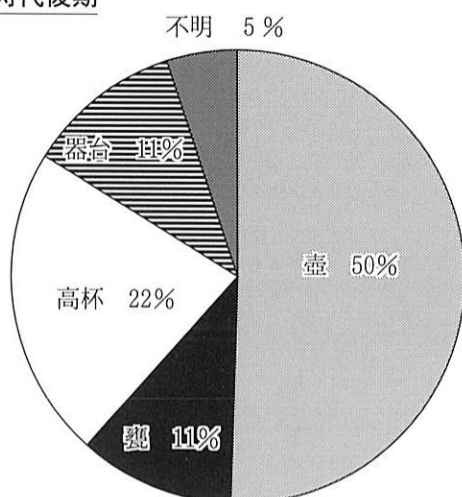
外来系土器の器形別比率(図301) 外来系土器のうち、弥生時代後期土器18点と古墳時代前期土器103点を対象に、器形別比率について検討する。

弥生時代後期土器の器形別比率を表したのが図301の上段である。壺が50%と約半数を占め、ついで高杯が22%、甕、器台が各11%を占める。弥生時代後期土器の多くは土器棺に関わる資料であるため、弥生時代後期土器全体の器形構成においても壺が多数を占める。土器棺は遺構として出土したものに土器棺1～4の4個体があり、すべて外来系土器となる可能性をもつ。大形土器、とくに土器棺については、外来系土器に依存した可能性が高いと考えられる。

古墳時代前期土器の器形別比率は、図301の下段のようになる。壺が43%、甕が39%と高率であり、器台・小形器台が7%、鉢が5%、高杯が4%、製塩土器が3%とつづく。壺、甕といった貯蔵、煮炊きに使用される比較的大形の器形が外来系土器の中で高率を示し、高杯、器台、鉢といった供膳形態を呈する中～小形の器形は、外来系土器に占める割合が低いといえる。

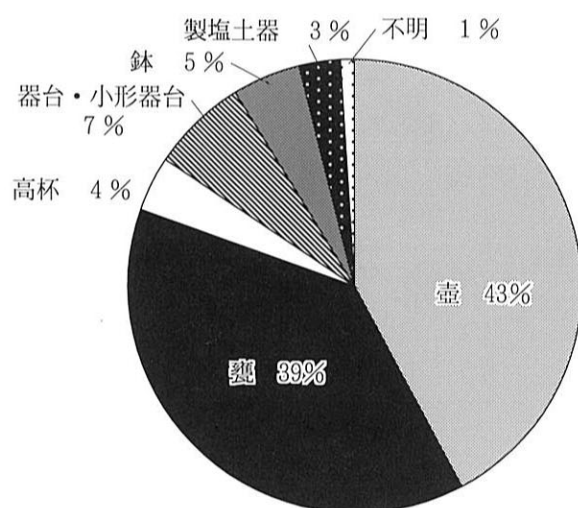
一方、古墳時代前期土器全体における各器形の構成比率を実測点数からみると、壺が27%、甕が33%、高杯が29%、器台・小形器台が3%、鉢が9%である。これと外来系土器の器形別比率を比較すると、壺、甕についてはやや外来系土器における割合が高めではあるが、全体の器形構成に占める割合をほぼ反映しており、このことは器台、鉢についてもいえる。しかし、高杯は全体の器形構成のなかで29

弥生時代後期



器 形	個体数
壺	9
甕	2
高杯	4
器台	2
不明	1
計	18

古墳時代前期



器 形	個体数
壺	44
甕	39
高杯	4
器台・小形器台	7
鉢	5
製塩土器	3
不明	1
計	103

図301 外来系土器の器形別比率

%を占めるにもかかわらず、外来系土器では4%にすぎない。個体数でみると、高杯の総数290個体中外来系の高杯は4個体であり、壺、甕に比べ高杯では、外来系の土器が少なく在地の土器が多数を占めるということがいえる。これは中形～小形の土器という土器の大きさとともに盛り付けの器という器形の性格・形態に拠るものではないかと考えられる。

なお、外来系土器の甕39個体のうち、河内庄内型甕は12個体、31%を占めており、他の地域の甕を凌駕する。逆に河内からの土器は甕に限られており、甕が選択的にもたらされ、受容されていると考えられる。

地域と外来系土器の時期・器形との関連 (図302) つぎに地域ごとに外来系土器の時期と器形についてみてみたい。図302は、各地域の外来系土器を各地域の編年軸にそって並べたものである。個体数が少ない地域では、時期について限定した箇所に配置できたが、個体数が多い地域はある程度の年代幅をもって土器を配置している。また、詳細な年代の決定が困難な土器については、年代幅をもって配置し

		関 東	東 海	湖 東	河 内	備 後	播 磨
弥 生 時 代	前						
	中						
	後						
古 墳 時 代	前期	郷内I 10~2	黒谷川I I		北 近 畿	山 陰	
		II 13~11	IV II				
	中期	III古 12~3	III V・VI古 (漆6群)				
		IV 14	IV V・VI新				
	後期	III新	III古				
		IV 11~2	V・VI 布留I				

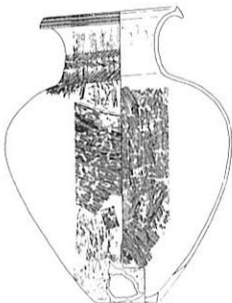
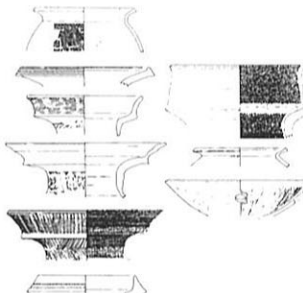
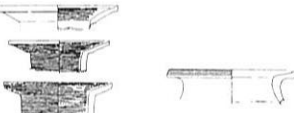
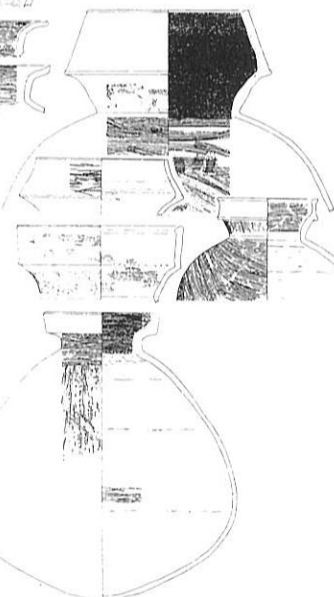
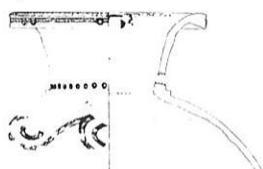
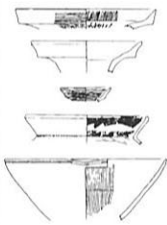
図302 各地域・時期の外來系土器

ている。

関東の影響を受けた外來系土器は2個体しかないものの、壺に限られ、弥生時代後期後半と弥生時代終末～古墳時代前期初頭に位置づけられる。

東海の土器は、S字口縁台付甕が多く、庄内式期の後葉に集中する。器台は、詳細な時期の限定は困難であるが庄内式期後半に位置づけられる。東海の土器は、庄内式期の後半にもたらされているようである。

湖東の土器は弥生時代後期に甕が、庄内式期後半に高杯と甕がもたらされる。湖東からは他地域と異

阿 波	吉 備	瀬 戸 内	特 定 不 可
 	  	  	  

なり、高杯が多くもたらされる点が特徴的である。

加賀の土器は布留式甕1個体が確認されたのみである。奥田氏に観察して頂いたのは1個体のみであるが、奥田氏が溝咋遺跡出土土器を概観されたところ、他にも加賀に比定される土器が多くありそうであり、それらはすべて布留式甕であった。加賀の影響は布留式期になってからみられるようである。

河内からは、弥生時代中期から後期初頭にかけて壺、高杯、器台がもたらされ、壺が主であり、うち2個体は大形の土器棺である。一方、古墳時代にはいると、庄内式期後半に多くの庄内河内型甕がもたらされる。先述したように甕に限られ、河内からはこの時期、甕が選択的にもたらされているといえる。

北近畿の土器は庄内式期後半から布留式期前半にかけてみられ、小形壺や甕がもたらされる。

山陰からの土器は、古墳時代初頭の壺が1個体あるものの、大半は庄内式期後半から布留式期前半に集中し、甕、大形鉢のほか器台が多くもたらされる。器台が多い点が特徴的であり、また他の外来系土器が多く出土する遺跡でみられる土製支脚がみられない点も注意される。

備後の土器は、弥生時代中期の壺1点にとどまる。

播磨からは、古く弥生時代前期末に壺が1点もたらされ、その後、弥生時代後期初頭に甕が2点、庄内式期に庄内播磨型甕が1点もたらされる。

阿波からは、弥生時代後期初頭に大形壺が1点もたらされ、土器棺として使用される。しかし、この土器は中部瀬戸内の土器である可能性をもつ。その後、庄内式期後半に壺、甕、鉢がもたらされ、壺が主体を占める。

吉備からは、弥生時代中期終末に高杯が1点もたらされる。庄内式期に製塩土器が、布留式期初頭に甕が2点もたらされる。

瀬戸内の土器は、弥生時代後期初頭に器台（または壺）、壺がもたらされ、その後庄内式期後半から布留式期前半に多数の壺がもたらされる。瀬戸内の影響のもと畿内で製作された可能性をもつ土器が多いものの、壺に限られる点が特徴的である。

外来系土器の時期 以上、地域ごとに外来系土器を概観した。図302をみても明らかなように、溝咋遺跡における外来系土器の時期は、弥生時代後期初頭と庄内式期後半～布留式期前半の2つのピークがみられ、とくに後者では庄内式期新相～布留式期初頭の時期に集中することがわかる。

これは、集落出土土器と同じ傾向を示す。庄内式期の古い段階の遺物は溝123肩部で一括して出土した土器に限られる。その他の時期の土器については、集落の土器がまとめて廃棄されたとみられる溝120をみると、弥生時代後期初頭から古墳時代後期までの土器、約150コンテナのうち、弥生時代後期初頭の土器は大形壺を主体として約10コンテナ、古墳時代中期～後期の土師器、須恵器も10コンテナ弱である。残る約130コンテナが庄内式～布留式の土師器であるが、庄内式期の古い段階のものは少なく、庄内式期後半のものが多数を占める。布留式期では、下田遺跡（西村1996）でみられるような最古相を示す土器は、いくつかの甕がみられる程度で僅かであるが、最古相を除くと、布留式期前半に位置づけられものは多く、新相に至るまで連綿とみられる。寺沢編年（寺沢1986）でいえば、布留0式の土師器は希薄であるが、庄内2式～布留3式に位置づけられるものは多いといえる。

溝咋遺跡の外来系土器は、弥生時代後期初頭の時期と庄内式期後半から布留式期前半にかけての時期に多くみられ、とくに後者では庄内式新相～布留式初頭に位置づけられる土器が圧倒的多数を占める。これは集落出土土器の時期的変動と共通する傾向を示す。

第4項 まとめ

以上、溝咋遺跡出土の外来系土器について述べた。以下に要点および推定される事柄、派生する問題点を挙げる。

- ・溝咋遺跡出土の外来系土器は125点を数え、関東～備後にかけての広範な範囲にわたる。
- ・外来系土器の地域の内訳は、東は関東から東海、湖東と加賀であり、近隣では河内が、西では北近畿、山陰、備後の日本海側から中国山地にかけての地域と、播磨、阿波、吉備を含む瀬戸内地域である。
- ・これら外来系土器は、播磨、阿波、吉備を含む瀬戸内地域の土器が半数を占め、これに北近畿～山陰

の土器と近隣の河内の土器がつづき、他に東海～湖東の土器が一定割合みられる。他に、関東、備後、加賀の土器が1～2点みられる。

- ・ 関東の影響を示す土器が2点出土した。1370は突帯文をもつ小形壺であり弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭に位置づけられる。東海の影響が考えられる土器であるが関東地方を中心に分布し、本遺跡出土例は既往の出土例の分布域とはやや距離を置き、分布の西端に位置することとなる。1519は、羽状縄文と結節縄文が施文される壺の肩部片であり、宮ノ台式の影響を受けた土器である。相模湾から房総半島にかけて分布する土器で、畿内では類例が矢部遺跡で報告される。畿内出土の外来系土器中、関東からのものは少なく、この2点は稀少な例といえる。

ただし、2点とも奥田尚氏の砂粒観察では在地の胎土と判定され、関東の影響を受けて在地で製作された可能性が高く、関東からの人の移動が推定される。

- ・ 外来系土器の器形は、壺、甕がそれぞれ4割程度を占め、他の高杯、器台、鉢などの器形は少数である。以上より、主に棺に使用された可能性が高い大形の壺や、熱効率の向上のため器壁の薄さが要求される甕が交易の対象となった可能性が考えられる。その他、山陰の器台、湖東の高杯についても、少数ながら選択的に受容されたと推定される。

- ・ 外来系土器は、弥生時代前期から古墳時代前期にかけてみとめられるが、弥生時代前期は1点、弥生時代中期は2点と少なく、そのほとんどが弥生時代後期初頭と庄内式期後半から布留式期前半にかけての2時期に帰属し、後者が多数を占める。とくに、庄内式新相～布留式初頭に位置づけられる土器が圧倒的多数である。これは集落出土土器の時期的変動と共通する。溝咋遺跡では、弥生時代中期後半から後期初頭にかけて、土器棺をはじめ木棺の底板とみられる板材が出土し、この時期には墓域が形成されていたことが明らかである。その後、遺構、遺物は希薄となり、古墳時代前期初頭、庄内式期に至って集落の居住域が形成される。すなわち、弥生時代後期初頭をすぎた時期から古墳時代前期初頭の間の時期が空白となる。この間、周辺の遺跡では、1本北東側の水系である芥川流域の沖積地微高地上に立地する芝生遺跡で、外来系土器や銅釧を含む遺物がまとまって出土しており、この時期の流通の拠点は芝生遺跡であったと考えられる。

- ・ 溝咋遺跡でみられる、庄内式新相～布留式初頭に盛期を迎えるといった動向は、外来系土器が出土する河内湖岸の中河内地域および河内湖の出入口にあたる上町台地先端とその対岸の地域の諸遺跡の動向とも共通し（山田1994）、沖積地における河川沿いの微高地という遺跡の立地についても共通することから、溝咋遺跡も中河内地域の諸遺跡同様、「津」としての機能をもつと考えられる。

- ・ 山田氏の論考をもとに溝咋遺跡と中河内地域の諸遺跡を比較すると、中河内地域の諸遺跡では、外来系土器の多くが山陰、吉備、讃岐、阿波など西方のもので、近江、北陸、東海など東方のものは混じる程度であり、この点で溝咋遺跡と共通する。また、溝咋遺跡では大和型庄内甕をはじめとする大和の遺物はみとめられず、中河内においても大和型庄内甕は数点程度しか出土していない。すなわち、大和からの物流はほとんどみとめられない点においても中河内地域の諸遺跡と共通する。

- ・ 中河内の諸遺跡は庄内式期初頭に一斉に出現するものの、その後の変遷は一樣ではなく、巨視的にみると布留式期前半に消滅する遺跡と初期須恵器出現期まで継続する遺跡に大別され、後者に属する五反島、本郷、船橋遺跡は流通の要衝として機能する。溝咋遺跡は、土器量は減少するものの布留式期後半も継続し、初期須恵器も出土する。古墳時代後期末葉に洪水のため集落が破棄されるまで、居住域を変えながらも継続しており、後者に属すると考えられる。ただし、初期須恵器、韓式系土器は出土するも

のその数は少なく、庄内式期後半～布留式期前半の時期に比べ、要衝の度合いを減じると考えられる。

- ・東海系土器は、中河内の諸遺跡では一遺跡あたり1～2点と少なく、河内湖東岸の中垣内遺跡と、河内湖の出入口に位置する垂水南遺跡（米田1983）、五反島遺跡でまとまった数が出土する。

こうした現象からは、琵琶湖、淀川水系ルートが東海からの流通の幹線経路になる可能性が想定できそうではあるが、溝咋遺跡では湖東の土器は一定量出土するものの東海の土器は4点にとどまり、先にあげたルートの流通はみとめられるものの、それほど大きな物流があったとは考えられない。その要因は後述する、淀川本流と離れるという立地にかかわる点が1点あるものの、主たる要因は、纏向遺跡における東海系土器出土量が示すように、東海からの流れはその多くが大和盆地東南部を終結地点としていたためと考えられる。また、このことは、山田氏が指摘される、「垂水南遺跡、五反島遺跡は東海の人々の移住が考えられる」ことを補強する。

- ・ここで流通の手段について少し考えてみたい。溝咋遺跡出土の外来系土器は播磨、阿波、吉備など瀬戸内地方の壺が大半を占め、これに河内の甕がつづき、北近畿～山陰の甕・鉢・器台と東海～湖東の甕・高杯が同程度を占める。

淀川水系の安威川沿いの微高地という立地を考えるならば、流通の主たる手段は船と考えるのが妥当であり、河内湖に直結した水運を用いることによって、瀬戸内からは大形の壺、河内からは器壁が薄い甕を一定量運ぶことが可能であったと考えられる。

一方、安威川の上流は、現在「茨木・亀岡線」と呼称される、北摂山地を安威川沿いに越え亀岡盆地にでるルートに直結しており、北近畿～山陰の土器は、丹後、丹波から亀岡盆地を経由して安威川流域にはいるルートを利用した可能性が考えられる。このルートでは、できる限り海、河川を辿る水運を利用しながらも、一部陸路を辿らなければならず、これが運ばれる土器の大きさや量に限界を生じさせた可能性が考えられる。

では、湖東、東海からのルートはどうであろうか。安威川は大きくは淀川水系に属しながらも、その上流が淀川と交わることはなく、下流は淀川が分流した北側の河川（現神崎川）に合流する（図3参照）。すなわち、溝咋遺跡は河内湖からさかのぼるには直結し便利であるが、淀川を下ってきた場合、冠水時には淀川本流から船で辿り着ける可能性があるものの、乾水時には淀川と安威川の最短地点で荷揚げし、湿地帯を横切る必要があり、こうした立地が湖東、東海の土器量に反映していると考えられる。また、淀川下流域において、本流沿いで適当な停泊地がみられないことが、垂水南遺跡や五反島遺跡に東海系の土器が集中する要因になっているのではないだろうか。

立地により外来系土器の搬出先が異なることは、京都市水垂遺跡（(財)京都市埋蔵文化財研究所1998）においても顕著である。水垂遺跡は京都市伏見区に所在し、淀川をかなり遡上した地点に立地する。ここでは外来系土器のうち、河内の土器が大半を占め、東海・近江・北陸・山陰・丹波系の土器がこれに次ぎ、大和・山陽・讃岐系の土器は少ないと報告される。同じ淀川水系でも山城に入ると、瀬戸内系の土器は少なくなるようである。

以上、溝咋遺跡出土の外来系土器について、まとめるとともにそこから推定される事柄、派生する問題を列挙した。次に、溝咋遺跡出土の他の外来系遺物との関連について考えたい。

溝咋遺跡では、製塩土器を含む外来系土器のほかに、他地域から搬入されたと考えられる遺物に、朱、結晶片岩材、軽石があり、産地同定が困難な軽石を除く他の二つについてみてみたい。

製塩土器については、先述したように吉備と讃岐からの搬入が明らかであり、古墳時代前期に塩が瀬

戸内の複数の地域からもたらされたことが首肯される。溝咋遺跡（その3）の調査において、古墳時代中期後半～後期の丸底1式（広瀬1988）の製塩土器が土坑からまとまって出土しており、これらも、未分析のため地域は特定できないものの、他地域から搬入されたものとみられる。

溝咋遺跡では、1524の渦巻文が描かれる壺をはじめ、赤色顔料が付着する土器が多く出土しており、自然科学的分析により6点が朱とベンガラ混合物であることがあきらかになっている（南1999）。他に杢形をした石杵が2点、周縁に縁をもつ円形の石皿が1点出土しており、分析試料は採取できなかったものの、その形態から朱の精製に関わる遺物であると考えられる。

朱は、水銀鉱山を擁する地域から搬入されたと考えられ、畿内周辺では、中央構造線に沿った紀ノ川、吉野川流域の奈良県、三重県、徳島県がその候補地としてあげられる。近年では、徳島県若杉山遺跡の発掘調査成果をもとに、朱の生産と搬出、流通に関連づけた研究成果が明らかにされており（岡山1998）、それによると若杉山遺跡で生産された朱は黒谷川郡頭遺跡、矢野遺跡をはじめとする鮎喰川遺跡群がその生産に直接あるいは間接的に関与し、流通の拠点としても機能したと考えられている。

溝咋遺跡では、先にあげた奈良、三重、徳島県のうち、奈良、三重県の土器は出土しておらず、徳島県すなわち阿波の土器は土器そのものが外来していることが明らかで、点数も多い。こうした土器の動向からは、溝咋遺跡に搬入された朱の搬出元としては、阿波が最も可能性が高いと考えられる。このことはまた、後述する結晶片岩材が外来していることから補完されよう。しかし、朱、結晶片岩とも吉野川流域だけではなく紀ノ川流域にも同じように分布するものであり、両地域の峻別は自然科学的分析においても現段階では困難である。したがって今回は、土器の動向からみる限りにおいては、朱の搬出元は阿波の可能性が高いことを指摘するにとどめる。

溝咋遺跡では、集落域から、幅6cm前後、長さ15cm前後の結晶片岩材が3個体出土している。3個体は、灰色系、緑色系、紫色系をそれぞれ呈する。

外来系土器のなかで阿波の土器は、結晶片岩が混和材として入っていることをその基準とした。片岩を含む土器のうち甕、鉢は、胎土の素地があざやかなだいたい色を呈し、阿波から外来したことが一目瞭然であるが、壺の多くは、胎土の素地がやや白っぽい明褐色を呈し、阿波においても同様な素地の土器はみられるものの、在地の土器の素地にも類似し外来土器とするには躊躇する。先にあげた結晶片岩が石材として外来していることを考慮すると、素地は在地の土を用い、混和材として結晶片岩を用いた土器が存在する可能性が考えられる。しかし、在地の土器の素地に類似し結晶片岩を混和材として含む壺の形態は、口縁部接合部の突帯に明かなように、阿波の特徴を示すものであり、外来土器か外来系土器かの峻別は困難であり、ここでは、結晶片岩材が、在地における土器製作において、混和材として利用された可能性があることを指摘するにとどめざるをえない。なお、結晶片岩製の石製品など、結晶片岩を用いた他の遺物は出土しておらず、溝咋遺跡では、混和材以外の結晶片岩の利用法については不明である。

以上、朱、結晶片岩といった外来系遺物をみると、外来系土器が示す溝咋遺跡と他地域の広範な交流のなかでも、とくに阿波との関係が着目される。文献史学からは、國造本紀をもとに三島溝杭と阿波との関連が指摘される（太田1925）。阿波から三島への経路については、土佐日記に示される航路が興味深く参照されるため、ここに挙げてみたい。土佐日記における土佐国から平安京への航路をみると、四国の南岸から室戸岬（室津）を回り四国の東岸沿いに進み、鳴門（土佐泊）から鳴門海峡をわたって淡路島の南岸をたどり、紀淡海峡を通過して和泉（和泉の灘）に至る。その後、和泉から大阪湾岸を北上

して淀川に入り、遡上して平安京に到着する。これは平安時代における航路であるが、阿波から三島へは鳴門海峡、紀淡海峡さえ通過すれば、比較的安全な航路でたどり着けるようであり、これは古墳時代前期においても大差ないのではないかと想定される。溝咋と阿波は、こうした比較的安全で安定した航路で結ばれることで、朱をはじめとする物資の流通があったと考えられる。結晶片岩材についていえば、佐保川沿いにある古墳時代前期後半に属する將軍山古墳は、石室の壁が結晶片岩の板石で構築され、結晶片岩は阿波もしくは紀伊からの搬入が想定されている（奥田1986）。こうした大量の石材の搬入は水運に拠るものと考えられ、土佐日記にみる航路のうち、少なくとも阿波から三島もしくは紀伊から三島は、古墳時代前期には水運により結ばれていた可能性が高い。

第5項 今後の課題

淀川水系には先述した高槻市芝生遺跡のほか、吹田市垂水南遺跡、京都市水垂遺跡のような同様な立地、性格をもつ遺跡があり、それぞれ流通の拠点として機能したと考えられている。これら流通の拠点とみられる集落からは、外来系土器のほか、銅釧、小形仿製鏡といった金属製品、朱や朱を精製したとみられる石杵・石皿、鳥形土製品、笹の文様をもつ土器など稀少な遺物が出土しており、出土遺物の種類に共通点がみられるようである。その用途、要因など、資料の蓄積をまって検討したい。

溝咋遺跡でも明らかなように、こうした流通の拠点とみられる集落の多くは、沖積地の微高地上という立地が示すように、基盤が脆弱で集落の範囲も限られたものであり、流通の拠点とはなり得ても地域の拠点にはなり得ないと考えられ、地域の拠点としては段丘上に立地する安定した基盤をもつ別の集落が機能したのと考えられる。たとえば、溝咋遺跡においては東奈良遺跡がこれにあたる可能性が高い。先学の指摘どおり（酒井1984）、小地域における結びつきがひとつの単位となり、これらが結ばれることで集落間ネットワークが機能したと考えられ、今後、三島地域をもとに、淀川流域におけるネットワークの具体的な事象を明らかにしたい。

外来系土器が多く出土する遺跡は、人や物の移動が推定され、物流、交易の拠点集落として位置づけられる。その最たる遺跡は大和東南部に位置する纏向遺跡であり、至近に纏向石塚、ホケノ山古墳、箸墓といった出現期の古墳が点在することから、これらの古墳に象徴される初期国家形成にあたっての基盤都市として位置づけられている（石野1979、寺沢1984）。古墳出現の直前から相前後する時期、すなわち庄内式新相～布留式初頭の時期、溝咋遺跡のような沖積地微高地上に立地し外来系土器が多く出土する遺跡が、畿内はもとより他地域においても多くみられるようになり、広範な地域間交流が盛んになったようである。土器の移動は人の移動、すなわち情報の伝達を示唆するものであり、情報の伝達と共有化は、それまでの小地域内では補えない何らかの内的あるいは外的要求が契機になって生じたものと考えられ、その要求こそがより広域な範囲における活動を可能にする体制、すなわち国家ではないかと考えられる。このような精神的な事象を考古学から捉えることは困難とは考えられるが、Service が指摘するとおり（Service, E.1971）、交易の複雑化、たとえば交易品に威儀具が含まれるといった事象は国家形成またはその萌芽を示すものと捉えられる。すなわち、流通が分配的であれば、中心となる集落の存在が推定され、集権国家の萌芽が認められるのであり、均質的であれば、均等な集落の存在が推定され、分権的な社会のあり方が想定できる。しかし均等であっても、古代の律令体制下の駅家にみられるように、周辺集落に比べ、中央的な遺構、遺物が顕著である場合には、また別の解釈が必要となるであろう。以上、外来系土器および外来系土器が出土する遺跡がもつ意義を示すにとどまるが、今後、集落

間ネットワークを考えるにあたっては、以上の視点に留意して考えていきたい。

小稿をなすにあたり、江見正己、岡山真知子、奥田 尚、比田井克仁、森岡秀人、山田隆一、米田敏幸の諸氏に多くのご教示を得ました。記して感謝申し上げます。

なお、小稿は、(財)大阪府文化財調査研究センター平成10年度研究助成事業の成果の一部です。

註

- 青木遺跡発掘調査団 1976 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
 青木遺跡発掘調査団 1977 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
 青木遺跡発掘調査団 1978 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
 赤塚次郎 1990 「2土器・土器群の形成」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎 1996 「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』
 石野博信 1979 「大和唐古・鍵遺跡とその周辺」『橿原考古学研究所論集』4
 今里幾次 1943 「播磨市之郷弥生式遺跡の研究」『播磨の弥生文化』
 岩崎直也 1984 「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌』17
 太田 亮 1925 『日本國史資料叢書 摂津』
 岡山真知子 1998 「古代における辰砂生産工程の復原——徳島県若杉山遺跡を例として——」『考古学雑誌』84-1
 奥田 尚 1986 「紅廉石片岩が見られる竪穴式石室」『古代学研究』111
 勝浦康守 1995 「阿波における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』IX
 神沢勇一 1968 「東海地方系の弥生式土器」『神奈川県立博物館だより』3号
 神沢勇一 1969 『神奈川県考古資料集成1. 弥生土器』
 岸本道昭 1995 「庄内甕播磨発生説考」『庄内式土器研究』X
 岸本道昭 1996 「新宮東山古墳群の研究」『新宮東山古墳群』
 勸京都市埋蔵文化財研究所 1998 『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』
 久地伊屋之免遺跡発掘調査団 1987 『川崎市高津区久地伊屋之免遺跡』
 酒井龍一 1984 「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』3
 Service, E., Primitive Social Organization. An Evolutionary Perspective, New York, 1971
 清水眞一 1994 「因幡・伯耆における庄内式併行期の様相」『庄内式土器研究』VIII
 陣内暢子 1998 「まとめ」『河内平野遺跡群の動態IV』
 角南聡一郎 2000 「被籠状突帯壺について」『溝咋遺跡』
 寺沢 薫 1984 「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』6
 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』
 中川 寧 1996 「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』13
 奈良県桜井市教育委員会 1976 『纏向』
 奈良県立橿原考古学研究所 1983 『院上遺跡』
 奈良県立橿原考古学研究所 1986 『矢部遺跡』
 西村 歩 1996 「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』
 榛名町教育委員会ほか 1998 『第1回群馬郡遺跡調査発表会』
 広瀬和雄 1988 「近畿地方における土器製塩」『考古学ジャーナル』298
 南 武志 2000 「溝咋遺跡出土赤彩土器の赤色顔料物質の分析」『溝咋遺跡』
 宮崎幹也 1994 「北近江の土器様相」『庄内式土器研究』VI
 村田文夫 1997 『古代の南武蔵-多摩川流域の考古学』
 山田隆一 1994 「古墳時代初頭前後の中河内地域——旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて——」『弥生文化博物館研究報告』第3集
 米田敏幸 1992 「庄内播磨型甕の提唱」『庄内式土器研究』III
 米田敏幸 1994 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』VII
 米田文孝 1983 「搬入された古式土師器」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』